

『心模様』久遠恭子

胸が苦しいと言う貴方に

私は近付かない

咳き込んでやつれていく貴方に

もっと近付きたいのに

私の身体からは鱗粉が舞うことを

知っているから

特異体質の私は小さい頃から

ずっとこの身体を疎んでいた

貴方に早く近付きたい

鱗粉を落とすことが出来たなら

水の中に足を浸す

酷く冷たい

手足が氷のようになって

皮膚は青ざめていく

鱗粉の身体に変化はなかった

太陽で焦がしてみる

チリチリと焦げてきて

私の身体は焼け付くよう

それでも

鱗粉の身体に変化はなかった

もう、飛び続けて

鱗粉を全て払い落とすしかないのかもしれない

貴方に触れるために

私は飛び続ける

羽がちぎれようとも

高く

木立を超えて
遠く

空の彼方まで

やがて、鱗粉は削ぎ落とされて

綺麗でしょ、私

そう言って貴方の枕元に寄り添うの

そこには鉛筆で貴方が描いた蝶の絵が置いてあった

沈黙それから何かが流れていく感覚

一瞬、眩暈がした

やっとわかった

私はその場から離れた

私達、いつも一緒なんだって

距離とか関係なくて

側にいることができる

それぞれの行く方向は違うように見えて

実は繋がっているんだということ

貴方に早く近付くのに

鱗粉を落とさなくてもいい

もう、忘れない

私はわたしらしく

ありきたりだけれど

傷んだ羽を癒して

また、飛び立つの

途切れ途切れだった

心を繋ぎ合わせる